

これからの書写書道教育学 内容論・教材論の立場から

上越教育大学 押木秀樹

1. 学習内容論・教材論検討の方向性と提案

1-1 検討の方向性について

学習内容論・教材論に関するラウンドテーブルについて、担当者は図表 1 の左部に示すまとめをおこなった。1は従来からの研究の継続として考えられる一方、3は理論構造の認識、別の言い方をすればパラダイムをかえることで意味を持つ部分とも考えられる。2は、その中間に位置するともいえよう。

図表 1 ラウンドテーブルの課題のまとめ

| | |
|---|-----------------|
| 1. 本学会における学習内容に関する研究成果の整理と確認、研究が不十分な領域の確定と推進 | ← 従来のパラダイム |
| 2. できあがった字に着目する学習活動から、字を書く動作や行為に着目した学習活動を重視する方向性の研究とその学習内容化 | ← 中間的位置づけ |
| 3. 文字を書くことにおける、言語の伝達・記録という機能以外の要素についての明確化とそれを生かした学習内容化 | ← 新しいパラダイムも必要か？ |

1-2 課題解決の糸口の提案

図表 1 に示した 2 と 3 について、効果的に解決していくために、図表 2 に示す 3 点を提案したい。

図表 2 課題解決の糸口としての提案

- | | |
|---------------------------------------|--|
| A. 文字言語のパラランゲージへの着目・音声言語との対比 (対相手の意義) | |
| B. 文字を書くことによる精神的作用や教育的効果 (対相手・個人内の意義) | |
| C. 文字を書くことの運動としての認識および身体性 (個人内の意義) | |

これらは、おおよそ図表 1 における 2 と C とが、3 と A・B とが対応する。この詳細については、後述する。

2. 研究成果の整理と確認作業について

まず、図表 1 の 1 「研究成果の整理と確認作業」について述べる。全国大学書写書道教育学会は本稿の時点で 20 年となるが、この間に学習内容に関する理論の明確化と蓄積がおこなわれてきた。一方で、平形が述べるように、その成果が十分に活用されているとは言い切れない。地道な作業ではあるが、図表 3 に示すような作業をおこなう必要があるだろう。

学習内容の理論の研究成果について、確認・共通理解をおこなうための作業がおこない、次に教員養成向けテキストや小中学生向けの教科書などに的確に生かされているかを確認する必要がある。その上で、研究が不十分な領域の特定をおこない、学会の課題として取り上げ、推進していくことが効果的であると考え

図表 3 研究成果の整理と確認作業について

- ・これまでの研究成果を確認し、共通認識とする作業。
- ・共通認識された成果が、生かされているかを確認する作業。
- ・研究が不十分な領域の確定と推進。

る。ラウンドテーブルにおいても、以下のような問題点が提示されていた。

- ・学習内容と教材の提示方法に関して
 - ・ 横書きについて～書写として書道として～
 - ・ 教科書における持ち方の写真などについての問題。
- ・文字と文字を書くことの理解的部分の内容化
 - ・ 文字の文化についての学習（文字の成立。金文などの実物の参照。手を動かして書くなどの活動）
 - ・ 文字の使い分けの学習（手で書くことの意義の理解。場面による使い分け。例：柿木教諭の実践²）
- ・その他
 - ・ 小学校3年生以降の硬筆教材について・小3ギャップの解消・平仮名の再学習など
 - ・ 漢字仮名交じりの書の教材について

3. 文字を書くことの運動としての認識および身体性

図表 1の2「できあがった字に着目する学習活動から、字を書く動作や行為に着目した学習活動を重視する方向性の研究とその学習内容化」について述べる。この問題は、3点から考えられる。

一点目は、現実の教育において、視覚的要素ばかりが着目され、運動的要素が軽視されているのではないかという現状認識に立ったものである。特に、日常的の書く場面で役立つ「速く書いても読みやすい字」の学習への対応ともいえよう。ラウンドテーブルにおいても以下があげられており、研究課題としていく必要が感じられる。

- ・ 行書という発想から、速書き・書きやすく書くなどの発想へ。（楷書信仰的なものからの脱却。）
- ・ 筆脈なども含めた動きの学習として。

二点目は、上記の学習内容化を支える理論についてである。たとえば、「用筆法・執筆法・点画・字形」といった捉え方と、同じ内容を「視覚面からの視点←→運動面からの視点」で捉えるといった考え方である。運動面からの分析においては、運動工学的な研究方法も課題となるだろう。

三点目は、身体性に関わる問題である。たとえば、人前でしゃべるのは恥ずかしいのと同様に、自分の字を見せるのは恥ずかしいといったことが見受けられる。その原因は、身体性のあらわれとも考え得る。文字情報の伝達手段の多様化において、欠落しがちな身体的重要性について、意識化し課題としていく必要があると考える。³

これら字を書く動作や行為に着目した学習を重視する方向性は、速書き・書きやすさ・文の中で文字を書くこと・人が手で書くことの意義・表現等の各場面において効果を発揮することが予想される。

4. 精神的作用や教育的効果の学習内容化（目的化）の可能性

図表 1の3「文字を書くことにおける、言語の伝達・記録という機能以外の要素についての明確化とその立証」について述べる。この点に関しては、対相手の意義と、個人内の意義とに分けられる。後者について、図表 4に示す。情緒の安定などの点で、字を書くこと、特に毛筆で字を書くことは効果があるのではないかという考え方がある。また、一般の人が書道に求めているものの一つがそれなのではないかという意見が、ラウンドテーブルにおいて聞かれた。

また、「書くことで覚える」という記憶における効果、味わいのある文章を声に出して味わうといったことと同様に、「手で書くことで味わう」という感じるものの効果も推測できる。

これについて、主観的・体験的に感じているレベルから、小松ら⁴のような臨床的研究および脳に関する研究等による立証のレベルにすることが課題となる。

5. 文字言語のパラランゲージへの着目・音声言語との対比

図表 1の3「文字を書くことにおける、言語の伝達・記録という機能以外の要素についての明確化とその立証」の内、他者との関係において意味を持つ部分について述べる。この部分に関する意見が、ラウンドテーブルにおいて多数聞かれた。この部分については、書写に芸術的要素を取り入れるべきだという意見として、短絡的に解釈される危険性があり、単に「習字」時代への逆行という見方もされかねない。情報化時代において、それ以前と異なる言語コミュニケーションがおこなわれていることを踏まえると、研究領域における理論構造につい

図表 4 手で書くことの効果（個人内）の推測

- ・ 精神的効果
- ・ 記憶における効果
- ・ 思考における効果
- ・ 感じるものの効果

ての認識を、ある程度かえていくことが求められる部分ではないかと予想される。そこで、手で文字を書くことの捉え方を「言語の伝達→芸術」という2極的な発想から、図表 5 に示すように、言語のテキストの伝達とそれ以外とに分け、特にそれ以外の部分が国語のコミュニケーションや、人と人のコミュニケーションにおいて、どのように機能するかという発想、特に図表 2 「A 文字言語のパラランゲージへの着目・音声言語との対比（対相手の意義）」を提案する。

5-1 パラランゲージへの着目について

情報活用能力の向上として e-mail の用い方の授業などもおこなわれている。その一つである岡村教諭の実践⁵では、「対面」「手紙」「e-mail」による伝達を経験した生徒の意見として、対面してのコミュニケーションは緊張を伴うものの、自分の意図が相手にきちんと伝わっていると感じられ、e-mail では緊張は低いと伝わっている感じも低く、手書きした手紙はその中間に位置していることが示されている。いわゆるテキストとしての言語内容が同じであっても、広義のメディアとしての音声（+表情・身振りなどの視覚情報）・手書き文字・フォントが異なることにより、コミュニケーションの様相が異なっている。これらの問題は、豊口⁶の指摘するとおり、ノンバーバルコミュニケーションの問題として捉えられる。ノンバーバルコミュニケーションの要素として、人体・動作・目・身体接触・対人的空間・色彩・時間・沈黙・パラランゲージなどがあげられるが、電話などの音声によるコミュニケーションと、手紙などの文字言語によるコミュニケーションの場合は、（やり取りされる間隔としての時間・沈黙などを除き）、その要素はパラランゲージのみということになる。パラランゲージ/paralanguage は、一般に「周辺 [パラ] 言語(声調など)」⁷、「話しことばに付随する音声上の性状と特徴」⁸とされる。しかし、文字言語においても、パラランゲージ的な要素があることは、経験的に感じられるだろう。現代的には、手紙は手書きがよいといった意見や、e-mail における顔文字などの利用（2004・押木⁹）などが、歴史的には「字は人となりであらわす」といった概念や、尺牘の意味の変化などがそれである。また、欧米の文化において、ビジネスレターとパーソナルレターの使い分けがある^{10・11}といった点も同様である。パラランゲージの意義や機能を明確にすることが、課題となると考える。

5-2 文字言語と音声言語の比較から

文字言語と音声言語とを、極めて簡易的に比較したものが図表 6 である。教室内の会話を考えた際にも、授業中のフォーマルな会話と休み時間のインフォーマルな会話が考えられる。話し方の指導として、「聞き取りやすい話し方」というある種の型が意識され、敬語とともに丁寧な話し方の指導が考えられる一方、円滑なコミュニケーションという視点からは、インフォーマルな部分も含めた話し方の学習も必要はらずである。単に言語の伝達能力の向上という機能性中心

の学習から、前述のように「声に出して読み味わう」といった方向性も見られる。書写教育・書道教育が、学校教育における文字を書くこと全体をカバーするものだとすれば、これら音声言語の指導に対応する、文字を書くことの指導が求められてしかるべきはないだろうか。

欧米におけるノンバーバルコミュニケーションの分野において、Marjorie F. Vargas は、文字言語について筆跡学に触れる程度にとどまっている。一方、同氏は「音楽と視覚芸術は（中

図表 5 手で書くことで伝わるもの

| | | |
|--------|---|---------|
| 発信者 | → | 受信者 |
| 言語的内容 | | 言語的内容' |
| その他の内容 | | その他の内容' |

図表 6 文字言語と音声言語の比較から

| 手書きによる文字言語 | 音声言語 |
|---|--|
| 読みやすい文字・文書 (書写の手本的?) | 聞き取りやすい話し方 (アナウンサー的?) |
| かしくまった(手紙など)書き方 ↓↑ 友達同士やり取りする際の書き方 | かしくまった話し方 ↓↑ 友達同士の気楽な話し方 |
| 個人的な手紙は、手書きがうれしい | 家族や友人の声に、親しみを感じる |
| 手書きの手紙は、気持ちが伝わる。 | 声から相手の様子がわかる。 |
| 手で書き味わいたい日本語 | 声に出して読み味わいたい日本語 |
| 手で書いて覚える 手で書いて考える | 声に出して覚える |
| 文字による表現(書) | 声による表現(ラジオドラマ・声優) 声による表現(歌) |
| ※ E-mail など、本人の文字に関する情報が伝わらない。 ※ 筆記具を持って実際に書く動作など、身体性が表れる。 | ※ 電話など、音声に変化しないよう伝わるような技術的方向性を持つ。 ※ 体格や声帯の特徴などの身体性が表れる。 |

略) メッセージの送り手が受けてか、またはその両方になる…」としているように、視覚芸術としての書の文化を持つ日本においては、芸術表現とその受容もこの中に含めて考えることができるだろう。

5-3 研究とその実績によつては期待される効果

以上の考察から、図表 7 に示すようないくつかの効果期待される。もちろん、これは理論の構造の問題であり、従来の研究成果と無関係ではないこと、また教科構造の変容を求めるものではない点などに注意が必要であ

る。たとえば従来から指摘されている社会的指向性の問題などは、この構造の中でより明確に理解できるであろう。

そのための研究として、以下のような手順が必要ではないかと考えている。

- ・ 文字言語によるパララゲージ的要素のコミュニケーションにおける機能と効果
- ・ パララゲージ的要素の発現箇所(ある意味でのメディア、線・字形・etc)の特定
- ・ 教育が必要な部分の明確化(例:～が伝わる字/伝わらない字)

6. まとめ

文字を書くことの意義として、従来の成果の継承に加え、記憶・精神的作用といった個人内の意義と、コミュニケーションという対相手の意義とを考えてきた。対相手といった場合には、他者という意味に加え未来の自分という意味も含めて考えたい。またコミュニケーションは、広義に、テキストの伝達から美の表現/鑑賞までを含めて考えたい。文字言語の機能は、従来、記録・伝達等として捉えられてきたわけであるが、情報機器やバーチャル環境の普及によって、コミュニケーションという視点で捉え直すことで、その重要性が明らかになるのではないだろうか。人と人との理解に大きく寄与している可能性がある。

以上、図表 1 に示した3点のバランスを考慮し、今後の書写書道教育学の内容論の課題を見定めていくとともに、その教材化をはかっていくべきではないかという点を提案する。

図表 7 期待される効果

- ・ 情報機器の普及に伴う「手で書くこと」の意義の明確化とその学習内容
⇒表現する力・身体を用いてあらわすこと ↓
- ・ コミュニケーションにおける効果:
⇒伝えたい内容・伝えたい気持ち・人柄・個性・美・表現・身体性…
⇒社会的規範・型・社会的指向性(青山ら¹²)
⇒その他、人と人との理解に寄与するものなど
- ・ 「言語の伝達←→芸術」の二極から多極化の視点
⇒書写と書道の構造の明確化(2005・押木¹³)
⇒書写と書道の連関に関する理論的裏付け
(書写という名称の浸透状況の問題なども含む)
- ・ 受信者/鑑賞者もしくはその意識および能力の問題の解消
- ・ 「うまい←→へた」のみの呪縛からの解放
- ・ 毛筆を用いることの意義の確認とその学習内容
⇒増幅装置としての「毛筆」(2005・押木¹³)
- ・ 個人内の効果の明確化(覚える・感じるなど)

¹ 平形・沓名, 文字相互の大きさを決定する要因についての考察, pp. 30-35, 書写書道教育研究 19, 2005. 3

² 柿木, 文字意識を高める授業の試み, 第 15 回石川県書写書道教育研究大会資料, 2004. 12

³ 鈴木, 手の中の脳, 東京大学出版会, 1994. 05

(鈴木, 思考と身体性, 電子情報通信学会技術研究報告 HIP2005-51~78, 2005. 10)

⁴ 小松・河合, 書道療法の可能性とその問題点, 全国大学書写書道教育学会千葉大会, 2005. 09

⁵ 岡村, 電子メールから学ぶ情報モラル, 上越教育大学附属中学校 2004 年度教育研究協議会資料, 2004. 10

⁶ 豊口, 書くことに関する基礎研究(2)~コミュニケーション論の視点~, 全国大学書写書道教育学会千葉大会, 2005. 09

⁷ プロGRESSIVE英和辞典第3版, 小学館, 1998

⁸ Marjorie F. Vargas (石丸正訳), 非言語コミュニケーション, 新潮選書, 1987. 9

⁹ 押木, 文字は手で書かなくても良くなるか, 東書Eネット, 2004. 7

¹⁰ 小林, 活字及び印字機器の普及と書字教育の在り方, 書写書道教育研究 第8号, 1994. 03

¹¹ 押木・柏瀬, デモンストレーション「情報化と書写書道教育」, 書写書道教育研究 第13号, 1999. 03

¹² 青山・當波, 国語科書写の学習指導における個性化とその方策, 書写書道教育研究 第18号, 2004. 03

¹³ 押木, 確かな学力の育成を目指した指導の工夫・改善[書道], 中等教育資料No. 829, 2005. 6